

第三十回井月俳句大賞 「落し文井月さんの置き土産」

先般は全く思いもよらない入賞のお知らせを頂き大変驚いています。

何分にも句を作る事には全くの素人で、唯 10 年程前私の茶道の師より作句を勧められほんの少しかじったくらいで現在に至っております。作品に対する情景ですが、以前より健康維持の為ウォーキングを日課としていましたが、5 年程前に今のコースを見つけました。森と林が混在し道の端には四季折々の野草の花が眺められ、桜、ひのき、くぬぎ、栗、くるみ、エゴなどの木々の木もれ日の中歩く心安らぐコースです。

その道に初夏の頃になると若葉で精巧に見事に巻き込んだ落し文を見かける事がありました。親虫が、我が子の無事の羽化を願って精根込めて作り上げたゆりかご。何か切ない程の感動でした。一方、たまたま「郷土読み物井月さん」という上伊那東部教員会発行の冊子の井月さん逸話抄の中に、ひとつかみの落のとう・紙に包んだ山椒の若芽・ほこりを拭った柿の葉などを、知人宅を訪れる際、うやうやしく手土産として差し出したという一文を読みました。傍若無人と思われた井月さん、実は繊細で義理堅いお人柄だったのではないかと感じました。そんな井月さんがもし落し文を見つけたら袂に入れ手土産にしたかもしれない。又もしかしたらあの落し文を解くと中に井月さんの句がしたためてあるかもしれないなどと心遊ばせ作った一句です。

この度は身に余る賞を頂き、本当にありがとうございました。

伊那市 下平 三恵

伊那市長賞 「羽抜鳥さみしくなれば人に寄る」

この度は第三十回井月俳句大会にて伊那市長賞の受賞というお知らせを頂き、大変有難く厚く御礼申し上げます。この二年ほどのコロナ騒動で、どなたも色々な形でご自分の行動を振り返られた事と思います。私は「正しく恐れる」をモットーに必要以上に神経質にならず、句会はネットでも開催でも淡々と続けて参りました。吟行も同じで、時間と場所を選び少人数であれば、今までよりずっと空いて快適な事が分かりました。受賞した作品もガラガラの電車に乗り、参詣人は地元の人がチラホラという埼玉の神社へ行った時の句です。本殿の裏手に鶏小屋があり、神鶏が三羽ほど飼われていました。その鶏がとても人なつこくて、餌を持っていたわけでもないのに盛んに寄ってくるのです。ただその情景を詠んだ句に立派な賞を頂戴し、恐縮すると共に有難い事と心より感謝しております。

東京都 大溝 妙子

井上井月顕彰会賞 「井月の影颯々と麦三寸」

“第30回信州伊那井月俳句大会”のご案内をいただき、且ついろいろとご高配をいただきましたこと、有り難く御礼申しあげます。

山好きの江戸っ子の性にとって信州伊那谷は、いつも元気を呼びおこしてくれる颯々とした風が吹いています。そんな中でいろいろな“命”が空に向かって手を一杯に広げている姿が、特に印象に残っています。

一方、地元のたくさんのご縁からいただいた“馬刺し”や“蜂の子”、そして“鯉こく”の味など、どれをとっても天下一品だと思っています。加えて、南アルプスのすばらしい景観は、いつも私の俳句の手助けをしてくれています。

これからも一句一句感謝の気持ちを大切に、精進したいと思っています。ご指導を切にお願い申し上げます。

東京都 菅原 悟

長野県俳人協会賞 「武具飾る俄か主従のあにをとと」

久しく近代俳句というものを食わず嫌いしていた。

中学校の国語の授業で出会い、出会った瞬間「虚子」とか「秋櫻子」とか「草田男」とか名前がもうだめだった。(どうしてわざわざ、捻くれた変な名前なんだろう。クサタオ!? あ、もうパスパス) …身も蓋もない生徒だったが、同じ国語の授業でも前年に触れた『奥の細道』は、以来、今に至るまでじわじわと心身に刻まれていく。芭蕉とか曾良とかは“変な名前”でも、こちらは時代劇だから許せるのだった。

これも食わず嫌いをしていたなら、私は平泉、立石寺、最上川くらいしか『奥の細道』を知らずにいたかも知れない。「兵どもの夢の跡」も、永らく人間関係を適当に捉えていた。義経主従とは、弁慶とせいぜい歌舞伎の『勸進帳』の四天王くらいしか浮かばず、五月人形の童顔の義経にピンと来ないまま、柏餅を食べ食べ、御大将ごっこをしていたのだった。平和ボケだったのか。『奥の細道』は地味ながら、根気よく地味さに当たっていく度に面白さが倍増する。義務教育の授業では佐藤兄弟にはまず出会わない。坂東の地理に疎い私に輪郭が掴み辛い。何とか全貌が見えかけてきたとき本棚に眠っている子ども向けの『義経記』を読んだ。佐藤兄弟はじめ、義経との関係がやっと解ってきた。

義経主従…そこここにくつもの兄と弟の物語があったのだ。

京都府 新森 しのの

上伊那俳壇賞 「月蝕の峡に笥のほととぎす」

この度は上伊那俳壇賞を賜り、誠にありがとうございました。

唯々驚いている次第です。

今年 5 月 26 日に皆既月食がありました。生憎雲がかかっておりまして、半分諦めながら仰いでおりますと、切れ間から赤銅色の月が見えました。皆既月蝕の神秘的な天体ショーに見入っていると、時鳥の鋭い鳴き声が、夜の谷に響きわたりました。このような状況を体験して、句を得ることができました。

私は井月大会が高遠閣で行われていた頃、参加させて頂いた事があります。井月に思いを寄せる方々の手から手へ受け継がれて、今年で 30 回を数え、素晴らしいことと存じます。これからコロナ禍が収まった後は、益々充実して会が続きますことを願っております。

伊那市 三溝 恵子

角川「俳句」賞 「鯉こくの熱き一椀走り梅雨」

この度は「井月俳句大会」ですばらしい賞をいただき、ありがとうございます。

「伊那市」は亡夫の出身地であり、ここ北陸とは違う地域性にいつも驚きとうらやましさを感じておりました。「井月」の碑は義姉の住まいの近くでもあり、何回か訪れたことがあります。句集も手に入れ、折にふれ楽しんでおりました。

帰省する度に義母が、鯉の甘露煮や鯉こくを用意してくれ、海の魚とは違うほっこりとした郷愁あふれる味でした。

コロナ禍で、しばらくは墓参にも行けない状況ですが、治まったら是非、墓参と伊那の味を楽しみにいきたいと思っております。

「井月俳句大会」が、増々、盛会となります様、祈っております。

ほんとうに、ありがとうございました。

石川県 有賀 三枝子

信濃毎日新聞社賞 「ふらここを漕げば故郷の空となり」

井月のファンであります私の句が今回このような賞をいただくこととなり大変うれしく光栄に思います。井月の聖地-伊那へと句仲間を誘って巡礼した旅も懐かしく思い出されます。私は以前より幕末史に興味があつて勉強するなか井上井月を知ったのが俳句を始めるきっかけでした。今回の句は動乱の幕末に生きた井月の長岡への郷愁を詠ってみたく作りました。春の季語の「ふらここ」は童心へ戻れる遊具、井月もホロ酔い気分で「ふらここ」に身を揺らせば誰にも語らなかつた、また帰ることができなかつた故郷の空が見えてきたのではないのでしょうか。

選考にあたられました先生方に心よりお礼申し上げます。

東京都 植田 也風

中日新聞社賞 「陽の当る障子の中の人の声」

初めまして、紹介致します。

八十七才の老婆でございます。

散歩する時間も疎らです。

自分の家の前に来ますと、一句出ました。

(陽の当る障子の中の人の声)

選んで頂有難うございました。

新潟県 大図 栄子

長野日報社賞 「酒好きが故の親しみ井月忌」

俳句雑誌で井上井月が酒が大好きだったと知り、雲の上の存在である俳人に親しみを覚え、すらすらと句が生まれました。そういえば井月には酒を詠んだ名句が多いですね。放浪の自由律俳人種田山頭火や芥川龍之助も井月の影響を受けたとのこと。天才は天才を見抜くということでしょうか。

長野県は観光名所が多く、私は何回も旅しましたが、伊那市はまだ訪れたことがありません。コロナ禍が収束しましたら、井月の墓や「入神」と讃えられた書にお目にかかりたいと念願しております。

第30回を迎えられた「信州伊那井月俳句大会」が、今後ともますますご発展されることを祈念致します。

東京都 橋本 世紀男

伊那市有線放送賞 「つま先を風の流るる昼寝覚」

山口県 木嶋 政治

信州・市民新聞グループ賞 「井月を待つ縁側の月見酒」

この度は栄えある賞を賜り有難うございました。

新潟県の山間を出て、知る人の無い土地に住み着いた私にとって、越後長岡を出て伊那に現れ、住み着き没した井月は、親しみを感じさせる人物です。

物乞いのような姿の井月に伊那の皆さんは酒食や宿を提供して暖かく遇されたと聞いております。この度の私の句は、そんな大らかで優しい伊那の皆さんが、「今夜は特に招待したわけではないけれど、こんな良い月ならきっと井月さんが来るから、酒と肴を用意しておこう」と、いそいそと縁側に支度をされる心情と姿を詠んだものです。

大会に入賞したら是非伺って井月の足跡をたどりたいと思っていましたが、残念ながら今回は叶いませんでした。次の機会を待ちたいと思っております。

末尾ながら、貴大会のますますのご発展をお祈り申し上げます
有難うございました。

大阪府 大島 幸男